

総 説

心理学者・今田寛 90年の歩みと変化を語る¹⁾

今 田 寛²⁾

関西学院大学 名誉教授

〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原一番町1番155号

Hiroshi Imada talks about his 90-year career as a psychologist with special reference to “changes”

Hiroshi IMADA

Professor Emeritus, Kwansei Gakuin University

1-155 Uegahara Ichiban-cho, Nishinomiya-shi, Hyogo 662-8501, Japan

This article is based on my lecture presented at the 40th Winter Conference of JABS, held on February 22, at Kusatsu Spa, Gunma. As the only survivor of the five originators of JABS founded in 1960, I talked about its origin and history, with reference to the psychology of Japan, which formed the background of the history of JABS. As the originator of the Winter Conference of JABS started in 1985, I also talked about its origin and history, with special emphases on its interdisciplinary open-mindedness, informality or casual-wear communications, which should form the basic spirit of JABS. The last half of the talk was focused on my 90-year career as a psychologist, full of lucky “chance” encounters. Special reference was made to A. Bandura’s article entitled “The psychology of chance encounters and life paths” (Bandura, 1982). I divided chance encounters into “genuine” and “self-invited,” each could turn into negative and positive life-paths. The emphasis was made to live his/her life earnestly with possible full effort with long- and short-term goals ahead, so as to invite lucky chance encounters which may lead into self-actualization. Occasional references were made to “changes,” the key concept of the 2025 Winter Conference.

Key words: 90-year career of a psychologist, Hiroshi Imada; 60-year history of JABS; 40-year history of the Winter Conference of JABS

1) 91歳の誕生日を目前にした私を信じて、講演の機会を与えて下さった、元ゼミ生の榎藤眞織さんと、当日、身の回りのことに細かい配慮を下さった中村徳子さんに感謝します。また行動科学学会の歴史年表の1995年以後の作成にご尽力いただいた柳井修一氏に心から感謝します。また私の講演のために遠路駆けつけて下さった懐かしい古い会員、長田久雄、内山伊知郎、坂田省吾、大木祐二、今田純雄の各氏に感謝します。最後に、昼間のスキーでお疲れにもかかわらず、11時近くまで長時間お付き合いくださった皆さんに感謝します。

2) E-mail: imada0530@yahoo.co.jp

本論文は、2025年2月19～21日、群馬県草津温泉において開催された、行動科学学会第40回ウィンターカンファレンスの第2日、20時から標記のタイトルで行われた私の講演をまとめたものである。当夜は87枚のスライドを用意し、下記の4つのトピックについて話したが、特にトピック4は、私の90年の歩みについて、個人的なことも交えて気ままにお話したので、終わったのは何と23時近かった。しかし今回論文にまとめるにあたっては、トピック4については、写真の多くと、あまりにも私的なことはカットし、今回のカンファレンスのメインテーマ「変化」を意識してまとめた。ただ皆さんにとって珍しいと思える写真のいくつかは残した。以下、講演の時の雰囲気を残すため、話し言葉で綴る。これが、わが人生最後の論文になるだろう。

1. 2027年に100周年を迎える日本心理学会
2. 65周年を迎えた行動科学学会
3. 40周年を迎えたウィンターカンファレンス
4. 私の歩んだ90年

なお最後にまとめとして5を加えたが、この部分には当日の講演内容に、その後考えたことを少し追加している。

今回は、本会の65周年、本ウィンターカンファレンスの40年という節目の年にお招きいただき、大変嬉しく、また光栄に思っております。今日は上に掲げた4つのトピックについてお話しますが、1は今回主催者から求められたトピックです。今は名誉会員ですが、私は日本心理学会には68年間も所属していますので、比較的古いことを知る人間として、往年の日本心理学会について触れてほしいということだと思います。詳しいことは、2016年の横浜での国際心理学会に先立って、主催国日本の心理学についての紹介依頼に応じて私が書いたものがありますので、英語ですがそちらをご覧ください (Imada & Matsumi, 2016)。もっとも、初めに少し日本心理学会の誕生期のことにふれますが、残りは、2, 3についてお話する時に、それらの「地」をなすものとして話題にすることにします。

1. 2027年に100周年を迎える 日本心理学会

まず Figure 1 をご覧ください。この図は、2009年現在、日本心理学諸学会連合に加盟の51学会を、それぞれの創立年で表した累積曲線です。日本心理学会は1927（昭和2）年4月7日に東京帝国大学で創立されたわが国最古の心理学会ですので、図では左端に1が立っています。つづいて日本応用心理学会、日本動物心理学会とつづき、太平洋戦争が始まった1941（昭和16）年には、学会は「心理学会」一つになっています。これは戦時中の日本政府は、思想統制の容易さを狙って同種の会や組織を一つにまとめる政策を打ち出したからです。そして心理学会の傘下には、日本心理学会、日本応用心理学会、地方学会の関西応用心理学会（後の関西心理学会で、日本心理学会と同年同月10日頃に京都帝国大学で設立）が入り、戦後1946（昭和21）年に心理学会は解散し、旧に復しました。

Figure 1

2009年現在、日本心理学諸学会連合加盟の51学会を、それぞれの創立年で表した累積曲線。パネル上に歴史上の重要事項を記した。2023年現在の加盟学会は56。

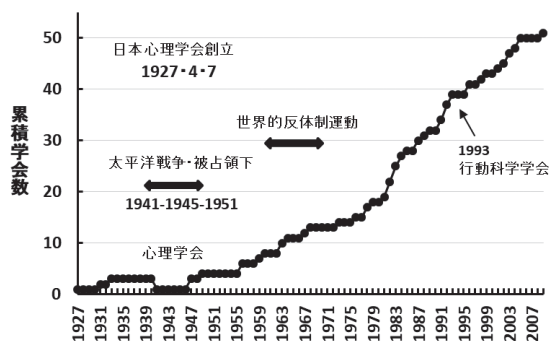


Figure 2 は、多分1942（昭和17）年頃の関西応用心理学会大会の写真ですが、右の看板に「心理学会関西部会」とあるのが見て取れるでしょう。こんな珍しい写真を持っているのは、私が心理学2世だからで、この写真に私の父・今田恵が映っ

Figure 2

1942 (昭和17) 年頃の関西応用心理学会大会記念撮影。当時の同学会の呼称は、「心理学会関西部会」(看板参照) であった。



ています (最前列左から4人目)。父は東大の松本亦太郎先生の弟子ですので、比較的草創期の日本の心理学者といえるでしょう。父に向かって右隣りが、初代関西応用心理学会会長の野上俊夫(京大)、その右隣りが2代会長の矢田部達郎(京大)、父は第3代会長(関西学院大学)、そして父の左隣りが第4代会長の佐藤孝次(京大)だと思います。第2列目、父の左上は同志社の遠藤旺吉、第3列目のその右上が私の先生で、父の一番弟子であった条件反射の古武弥正です。

太平洋戦争は1941年12月8日から、1945年8月15日まで、約3年8ヶ月続き、日本の敗戦で終わりますが、その後1951年まで約7年間、完全にアメリカの占領下に置かれ、日本は国家としての主権がなく、自主的に何も決定することができない時代が続きます。この期間は私の小学校から中学校の時代と重なりますが、その当時の食糧難、生活難は今お話ししてもわかってもらえないと思います。実は私が小学校に入学した1941年4月から、卒業した1947年3月までのちょうど6年間は、小学校という名が、国民学校に変更されました。したがって日本の教育史の中で、われわれの学年だけが混じりっ気のない国民学校生で、小学校を出ていません。当時の食糧難・生活難を示すデータを一つご紹介しますと、私の国民学校時代の通信

簿が6年間残っているのですが、そこに記載された私の身長と体重を見ますと、私は6年間で身長15cm、体重7kgしか増えていません。それを2005年当時の統計と比較しますと、この時代の小学生は6年間で、身長28.4cm、体重17.4kg増えています。これで私たちの時代の食糧事情がいかに悪かったがわかるでしょう。みなガリガリでした。なお当時の様子は、私たち昭和22年甲東国民学校卒業生の文集に詳しく紹介されています(甲東22会記念誌出版委員会、2007)。また日本は国として主権がありませんでしたから、工業製品(例えばカメラ)を輸出する折にも、今のように Made in Japan と刻印することは許されず、Made in occupied Japan、つまり「被占領国日本製」と書かねばならない情けない時代でした (Figure 3 参照)。

Figure 3

アメリカの被占領下にあった日本では、日本の製品を輸出する際にも、Made in Japan と刻することはできなかった。



それでは被占領下の日本の心理学はどのようなものだったのでしょうか。一言でいえば、アメリカの新行動主義心理学、中でも動物実験を基盤にしたハルの学習理論が、怒涛の如くに流入し、学界を席卷した時代と言えるでしょう。

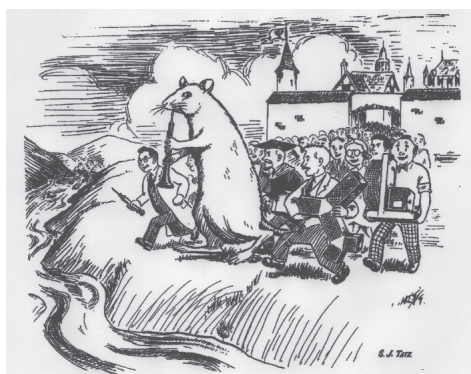
例えば1957年に出版された『現代心理学の展望』(矢田部・園原、1957)の第6章「動物心理学」の章に、東大の八木晃先生は次のように書いておられます。「現代心理学の基礎領域で占める学習

の地位は、今から20～30年ほど前のゲシュタルト心理学において、知覚が占めていた地位にも匹敵すると思われる。ことに動物を用いての行動・学習実験は、心理学の基本的問題を解決するための基礎データを提供している。わが国においても、戦前に動物を飼育していた研究室はきわめてまれであったが、今日では大きな研究室で動物を飼育していないところのほうがむしろ少ない・・・」(同上書, p.117)。1957年と言えば、私が大学学部を卒業した年ですから、私はこのような時代に心理学を始めたことになります。

Figure 4 は1950年にアメリカの心理学者ビーチが、「多くの実験心理学者の現在の姿」と題して描いた風刺画ですが、ハーメルンの笛吹き男の逸話にならって、アメリカの当時の実験心理学者が、我も我もと白ネズミの実験に走った当時の様を表しています。1950年代にはアメリカではすでに行動主義批判がぼつぼつ出てきていましたが、日本の心理学はアメリカに約10年遅れていましたので、まさにこの絵のような状態が、そのまま戦後の日本の心理学ワールドに流入してきたとみてよいでしょう。そして私もネズミの実験に走りました。当時の私の目には、動物実験を行っていた先輩たちは、何か「我こそは心理学の正道を歩む者なり」というような、自信満々の姿に映りました。まさに先の八木の引用にもあるように、動物実験は「心理学の基本的問題を解決するための基

Figure 4

「多くの実験心理学者の現在の姿」と題するビーチによる風刺画 (Beach, 1950)

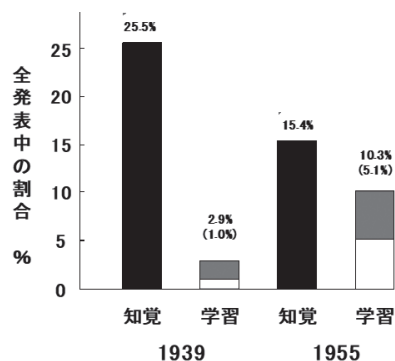


礎データを提供している」と言い切る自信が背景にあったのではないのでしょうか。

Figure 5 は、先に八木からの引用文を裏付けるデータです。八木の指摘するように、戦前(左半分)は、当時の日本の同盟国ドイツのゲシュタルト心理学の影響が強く、知覚の発表の割合は多いですが、学習は2.9%に過ぎず、動物学習は図中の括弧内にあるように、わずか1%です。しかし戦後の1955年になると、知覚の伝統はなお保たれてはいますが、戦前の25.5%から15.4%に落ち、他方学習は、戦前の2.9%から10.3%に増え、その約半数が動物学習の発表であることがわかるでしょう。この後の傾向については、Figure 6 も参考にしてください。

Figure 5

戦前(1939)と戦後(1955)における、「知覚」(黒)、学習(灰色、白)、動物学習(白)に分類された日本心理学会大会発表数の全発表数に対する割合を示す。



2. 65周年を迎えた行動科学学会

そして本学会の母体となった、異常行動研究懇話会が呱呱の声を上げたのは、まさに今述べたハルの行動理論と動物実験が全盛であった頃でした。時は1959年7月23日の午後、場所は北海道大学の芝生の上と、誕生の時と場所ははっきりしています。第23回日本心理学会大会の2日目の午後に、ラットの恐怖条件づけと回避条件づけの口頭発表が8つ集まったセッションがありました(日本心理学会発表論文集分冊B, p.12にプログラム)。

そのセッションの後、「たまたま芝生で雑談していた、3、4人の間で、ネズミの基礎実験を通して、神経症、異常行動の発生と消去のメカニズムに関心をもつもの、学習・行動理論の臨床的適用に関心をもつもの同士が、ごく気軽にインフォーマルに話し合える会を作ろうではないかということになり、そしてその秋に早大で第1回の準備会が開かれ、会員数初年度17名、第2年度25名という規模で、異常行動研究懇話会が発足した」(今田, 1972, p.261)。上に3、4人というのはうろ覚えで、以下の5人であったように思います。梅津耕作(精神医学研究所)、平井久(早稲田大学)、春木豊(早稲田大学)、松山義則(同志社大学)、今田寛(関西学院大学)。この中で松山以外は、これに先立つセッションでの発表者で、梅津、松山を除けば皆当時はまだ大学院に席を置くものばかりでした。若さに加えて今一つの特徴は、梅津は慶応の出身ですので、この会は、東西の4私大(早慶同関)の自由な発想から誕生したといえるでしょう。そして当初から「気軽に、インフォーマルに」という、普段着で話そうという空気が強い中で発足した基礎と臨床の橋渡しを志す会でした。今日は、この5人の中の唯一の生き残りで、あと3ヶ月で91歳になろうとする、まだ元気な私が、昔話を直接聞いていただくために、はるばる関西からやって来たということです。

上に動物実験を基盤にしたハルの行動理論の影響を大きく受けたと書きましたが、実はわれわれのグループが直接大きな影響を受けたのは、イエール大学のハルの門下生の、いわゆるイエール学派、あるいは新ハル派といわれる人たちでした。以下に示す彼らの著書名から、彼らがハルの行動理論を、異常行動や社会行動やパーソナリティなど、幅広い領域に適用しようとしていることがわかるでしょう。

- ・『欲求不満と攻撃』(1939)
(Dollard, Doob, Miller, Mowrer & Sears)
- ・『社会的学習と模倣』(1941)
(Miller & Dollard)
- ・『精神分析学の諸概念の客観的研究の概観』
(1943) (Sears)
- ・『人格と心理療法』(1950)

(Dollard & Miller)

- ・『学習理論とパーソナリティ・ダイナミクス』(1950) (Mowrer)

この中で特に Miller や Mowrer は、動物の回避学習を、神経症の症状形成と維持のモデルと考える立場に立ち、多くの動物実験を行いましたので、これらがわれわれに非常に大きな刺激となり、基礎的な動物実験をしていますが、それが臨床的応用につながるという希望を私たちに与えてくれました。

1959年に発足した異常行動研究懇話会は、1964年には懇話会がとれて、異常行動研究会、通称 PBD 研究会と名乗るようになりました。PBD とは Personality and Behavior Disorder の頭文字で、これは行動的立場をとる(私は目にしたことはないのですが)キャメロンという人の著書のタイトルだそうで、梅津の提案によるものと記憶します。呼びやすいので、私たちは研究会のことを専ら PBD と呼んでいました。

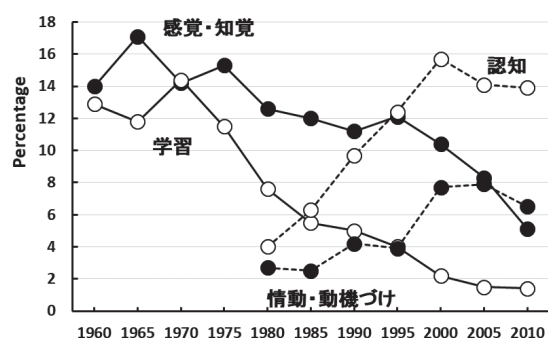
ところが、1960年代になると世界的な反体制運動が起こります。ご存知のように1961年にヴェトナム戦争が始まり、1963年にアメリカがヴェトナム戦争に介入し、15年間泥沼状態が続きます。その間に、アメリカでは激しい反戦運動を核にして様々な反体制運動が起こり、それまでのすべての常識、つまり体制 (establish されたもの) を疑問視する時代を迎え、その反体制運動は全世界に広がり、全世界的に大学でも激しい学生運動が起こります。心理学でもそれまでの常識であった行動主義が批判の矢面に立つことになり、その他の要因も重なって、行動主義の衰退と認知主義の台頭、ある意味で意識主義への復帰が起こったことは多くの皆様のご存知のことでしょう。

Figure 6 を見てください。この図は、1960年から2010年までを5年飛びで、日本心理学会大会での図上の各分野での発表件数が、全体の発表件数の中で占める割合の時代変化を示したものです。

この図に見られるように、1960、1965、1970年には高い率を占める感覚・知覚と学習は、その後下降を辿り、特に学習は、2010年にはわずか1%にまで落ちています。それに代わって、1980年に新たに加えられた認知という分野は、認知主義の

Figure 6

感覚・知覚と学習という伝統的分野と1970年代に追加された新しい分野別の、日本心理学会大会での発表件数が全体の発表件数に対して占める割合の時代変化を、5年飛びに示す (Imada & Matsumi, 2016, Figure 3に基づく)。



台頭とともに、急速に上昇を見せています。

なお行動主義の時代は、意識的な言葉の使用はタブーでしたので、ある意味非常な自由の拘束があった窮屈な時代だと言えます。その拘束が外れて自由を取り戻した姿は、冒頭に示した Figure 1 で、1970年代の終わりごろから、心理学関係の学会数が急激に伸びている姿にも反映されていると思います。

しかし、このような時代を迎えますと、ハルの学習理論と動物実験を基盤とした異常行動研究会という名称も時代に合わなくなってまいります。それでもなお名前を変えずにこの会が存続したのは何故でしょうか。それはおそらく、数ある心理学関係の学会の中で、心理学の中の狭い専門に関係なく、基礎の人も臨床の人も、パーソナリティの人も社会の人も、自由なインフォーマルな雰囲気の中で意見を交わすことができた異常行動研究会のもつ普段着的雰囲気を好む者が多くいたということではないでしょうか。そしてその自由な雰囲気は、1985年から始まった、正に今日のこのウィンターカンファレンスによって助長され、お酒も交え、家族ぐるみで、よく学び、よく遊ぶ会として受け継がれていったのだと思います。そして1993年になって会の名称は行動科学学会に変わりましたが、今年で本会は何とその母体の誕生から

65周年を迎えているということは、創始者の一人として誠に感無量という他ありません。

なお会の名称変更は次のような事情によります。一つは上にも述べたように、異常行動研究会という名が時代に合わなくなったこと。第二は、研究会だと学会出張費の申請がしにくいという現実的な理由でした。名称変更の折にホテルの一室で行われた総会で、受付をしていた若手の会員が、通りすがりの2人連れが、看板を見て、「異常行動研究会やて？」と嘲笑しながら通っていったのに恥ずかしい思いをしたとの発言があったのは印象的でした。まだ戦後が残る、社会がささくれだっていた草創期には、異常行動のつく名称に何の違和感も感じなかったのに、日本社会も随分変わったものだと思います。しかし今から思えば、差別撤廃の精神にも整合した、賢明かつタイムリーな名称変更だったと思います。その時の私は、行動という名は、客観性を重んずるという意味だと単純に理解していました。

なお本会のことについては、1972年と、60周年の2022年に、それぞれ求められて書いた私の論文もありますので参考にしてほしいと思います (今田, 1972, 2022)。

3. 40周年を迎えた ウィンターカンファレンス

ウィンターカンファレンスについては、次の4の中に含めてお話ししますが、同カンファレンス10周年を記念して依頼に応じて私が書いた論文も参考にしていただきたいと思います (今田, 1995)。

なお行動科学学会の1994年までの歩みを年表にまとめたもの同学会の出版物に関しては本誌の次の論文 (柳井ら, 2026) を参考にしてください。

4. 私の歩んだ90年

ここからは、ウィンターカンファレンスなので、気ままに自由に話してもよいとのことでしたので、お言葉に甘えます。なお今日は私の狭い意味での専門のことについてはお話しません。それについては日本心理学会と日本動物心理学会からオーラ

ル・ヒストリーとしてまとめられています。そちらをご覧ください（今田・澤，2014；今田，2016）。

4-1. 自己紹介

私は1934（昭和9）年5月30日に、兵庫県西宮市で、関西学院大学心理学教授の父・今田恵と、母・幾代の次男として生まれ、6人兄弟姉妹で育ちました。甲東国民学校を1947（昭和22）年に卒業し、その年から始まり今に続く6・3・3・4の学制のもと、関西学院新制中学部に入学し、エスカレーター式に大学に進み、文学部心理学科に入りました。1957（昭和32）年に心理学科を卒業し、続いて大学院に進み、博士課程の3年次にアメリカ中西部のアイオワ大学に留学し、1963（昭和38）年8月に博士号 Ph.D. を取得しました。帰国した後は、1968年からの British Council の奨学金によるイギリス留学を挟んで、関西学院大学心理学科に席を置き、教育者、研究者、行政者として計44年間勤め、2003年、68歳で定年退職しました。なお、1997年から2002年までは同大学の学長を勤め、関学退職後、広島女学院大学の学長を5年半勤め、2011年に西宮に戻り、同年、教育界への貢献に対して勲2等瑞宝重光賞をいただき、昨年は卒寿を卒業生の皆さんに祝ってもらい、今日に至っています。

4-2. 私の90年の人生における“変化”

— “変化”のキッカケを中心に—

これから後は雑談とことわってかなり私的な脱線も含めてお話ししましたので、この論文では、最終的にできるだけ心理学的な締め込みに収めるように進めます。

今回のウィンターカンファレンスのテーマは変化ということですが、変化には、そのキッカケを基準に少なくとも2種類あると思います。一つはキッカケが自分自身にある場合で、自分の意思によって生じた変化ですので当然予測可能な変化です。今一つは、キッカケが他者や偶然の出会いにあり、そのために本人にとっては、自分の意思に関係なく思いがけない方向に人生が展開するような場合の変化です。

実は私の90年の人生を振り返ってみると、私の

人生行路を大きく変化させた重要な変化は、ほとんど、キッカケが他者にあつたために、私にとっては思いもかけない予想外の人生の展開になってしまった場合だったように思います。今日はそのような事例を自己紹介を兼ねて4つお話しします。ここで「仮に」、自分自身が思いもかけなかった出来事や人との出会いの事を、「偶然の出会い」（chance encounter）と定義しておきましょう。

実は、偶然の出会いによって人生行路が思いもかけない方向に開けたというような事実は、「行動の予測と統制」を目的に掲げる心理科学にとっては、あまり嬉しくないことといえるでしょう。「人生行路（life path）」は行動の連鎖なので、心理学は長期にわたる人生行路の予測においては無力だということになるからです。これはつまらない疑問のようにも思えますが、案外無視できない疑問かもしれません。だとすれば、誰かこのような問題を取り上げた心理学者はいないかと調べてみますと居ました。それは有名な Bandura です。

彼は1982年の *American Psychologist* に、The psychology of chance encounters and life paths, つまり「偶然の出会いと人生行路の心理学」という論文を書いています。その論文の中で彼は、Psychology cannot foretell the occurrence of fortuitous encounters. (Bandura, 1982, p.749) と明記しています。つまり「心理学は偶然の出会いによる出来事を、事前に告げることはできない」と書いているのです。それでは、このような心理学の限界を知りながら、Bandura はこの論文で何を書いているのでしょうか。彼は偶然の出会い、しかも不幸な偶然の出会いをしてしまった人の不幸を、少しでも軽減するための個人的・社会的要因について述べています。心理学者として人びとを不幸から救うのは務めだからで、幸せな偶然の出会いに関しては捨て置いてもよいというスタンスだったと思います。

実はこれから紹介する私の人生の偶然の出会いには、すべてその結果、思いもかけない幸せな方向に人生が展開した事例なのです。したがって、Bandura に倣って私がこれからお話をすることを表現するとすれば、Psychology of lucky chance encounters and my life path. ということにな

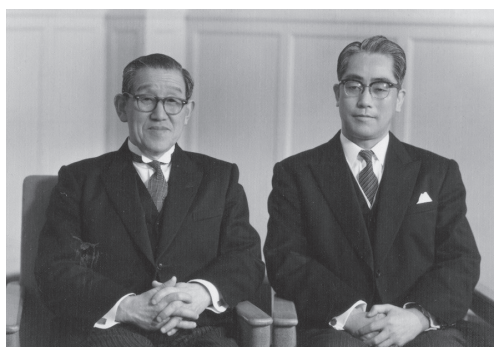
ります。ただ psychology というほどのことはお話できると思いませんので、正しくは次のようなタイトルが適切でしょう。「90歳の一心理学者が、彼のラッキーな偶然の出会いと、その人生行路について語る一特に「変化」との関わりにおいて」。以下、このタイトルで、「90年の人生の中で起こった“偶然”の出会いと予期せぬ展開」を4つ紹介します。

①アメリカ留学と学位取得

まず Figure 7 をご覧ください。向かって左は私の父・今田恵、右は父の一番弟子で私の先生でもある古武弥正です。この写真は1961年、私の結婚式当日の、私の父と私たちの媒酌人の記念写真です。

Figure 7

父・今田恵（左）と古武弥正（右）（1961）



実は私が博士課程の1年目か2年目のある時、専任助手をしていた私の研究室に古武先生が片手に書類を持って入って来られ、「君、これ受けて見んか」とその書類を手渡されたのです。見るとフルブライト留学試験の願書です。そして先生いわく、「これな、うちの節子（お嬢さんでヴァイオリニスト）のために取り寄せたんやけど、結婚が決まったんで要らんようになったんや」とのこと。思いがけないことでしたが、指示通りに神戸で現在の TOEFL の前身のような語学試験を皮切りに、何段階かを経て、最後は東京での面接試験、翌日発表、合格ということになってしまいま

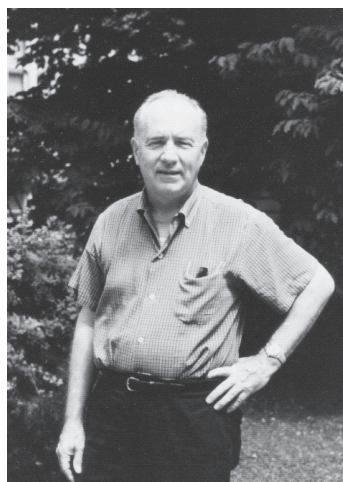
した。当時は合格率200人に一人とか言われていた時代ですし、エスカレーター式の関学で入試を知らない私にとっては初めて「試験に受かる」という喜びでした。ちなみに現在の6・3制の学制が始まった1947（昭和22）年の中学校への入学に際しては、進駐軍の命令で、学科試験は禁止されていました。

こうした偶然で、思いもかけずアメリカ留学が決まってしまったのです。

そこでどこに行くかということについて父に相談したところ、「アメリカには田舎に小さな大学町というのがあるので、そういう所でじっくり勉強するのはよいよ」と言われました。もう一つ、「大学の名前で選ぶな、人で選べ」とも言われました。そこで古武先生にも相談し、結果的に、ハルの直系の弟子の Kenneth W. Spence のいるアイオワ大学を選びました。シカゴのあるイリノイ州の西隣の、トウモロコシと豚で知られるアイオワ州アイオワ市にある大学で、当時人口約2万人、うち約1万8千が学生、町の周辺はトウモロコシ畑ばかりという、正に父のいう大学町でした。アイオワ大学の心理学科はアメリカでも10番目に古い1890年の設立で、そこにスペンスが君臨していました。私は日本ですでに博士課程の3年度の半ばまで進んでいましたので、遊学のつもりでい

Figure 8

Kenneth W. Spence (1907-1967)



たのですが、フルブライト試験との関係か、大学院に放り込まれ、学部を出たての院生と机を並べることになりました。ところが、後に知ったのですが、このアイオワ大学の心理学の大学院は、先に述べた Bandura が博士学位 Ph.D. を取得した大学で、彼も論文の中で述べていますが、厳しい大学院コースで有名だったようです。私は日常会話には苦勞しませんでした、膨大なリーディングと試験、試験の連続には最初は大変苦勞しました。しかしそれにもしばらくすると慣れてきました。そしてある時、スペンスの授業で、ハル・スペンス理論との関係で、「 $H \times K$ or $H + K$?」というタイトルでレポートの提出が求められました。

実はハルの学習理論の中には $E = H \times D \times K$ という公式があります。E は excitatory potential で行動を起こそうとする力、H は habit、つまり習慣あるいは S-R 結合の強さ、D は drive、つまり動因、K は incentive、つまり誘因です。この式に対して、弟子のスペンスは、 $E = H \times (D + K)$ だと主張します。余談ですが、スペンスの理論は時に incentive-motivation theory と呼ばれ、誘因あるいは目標予期を強調する理論でしたので、ハルは、誘因 K をスペンスの名の Kenneth の頭文字をあてたと噂されていました。

ハル・スペンス理論の魅力の一つは、このような理論上の違いを実験的に検証できるところにあるため、当時はこの違いを巡っていくつかの実験がなされていました。レポートの課題は、これらの実験をまとめて、そこからどちらの主張が正しいかを調べよというものでした。実は私が書いたレポートに対して、スペンスから「Excellent paper, A+」という評価を得たのです。そのために、スペンスがある時、このレポートを手直々に私のオフィスに来て、素晴らしいペーパーだと絶賛してくれ、続いて、「お前は私の下で Ph.D. を取得するべきだ」と言われました。当時私は関学での専任助手を他の人に代行してもらっていたので、2年以上の滞在は無理だと言いますと、お前は日本でドクターコースの3年まで行っているのだから、日本で取った単位をこちらの教務で読み替えてもらえれば単位数は足りると思う。後は、学位論文と、総合試験と、語学試験だ。「お前な

ら出来る」と言われて、無理やり Ph.D. コースに押し込まれました。ただそれからは必死でした。最後の3か月は論文のタイプ打ちのために妻を日本から呼び寄せ、当時まだ日本にはなかった電動タイプライターを借りて、6部提出というので5枚のカーボン紙を挟み、一字間違えれば打ち直しという神経をつかう作業を妻の協力のもとで成し遂げ、無事1963年8月に Ph.D. を取得できました。いまのパソコン時代とは大違いでした。

このように、留学に加えてアメリカでの Ph.D. 取得は、私の人生にとってはまったく思いもかけない展開となりました。

②日本人論（日本人の心理）との出会い

1973～74年頃のことだったでしょうか。関学の法学部を定年退職し、大阪近郊の枚方にある関西外国語大学で留学生のためのプログラムを担当していた武内辰治先生から電話がかかり、同大学の留学生プログラムの中に「日本人の心理」(Japanese psychology) の講義を予定したいので、それを担当してほしいとの依頼を受けました。もちろん私は基礎心理学者だから無理と断りましたが、その後も何度も電話がかかり、その都度お断りしていたのですが、ある時、私が留守の時に、電話に妻・節子が出て、「わかりました、私が引き受けさせます」と受けてしまったのです。帰宅してそれを知った私は大パニックでしたが、すでに武内先生は事を進めていたので今さら断れない状態でした。ちょうど夏休みの初めだったので、その夏休みは9月からの講義のために、留学以来の必死の準備をし、何とか開講にこぎつけました。しかし始めて見ると、実験心理学者独特の、因果関係で物事をすっきり整理してデータを交えて話す講義スタイルがアメリカ人学生に受け、人気講義になりました。その後関学でも国際交流プログラムが始まり、同科目を担当したので、私は都合20年近く Japanese psychology の講義を担当したことになります。素人ながら文化心理学のはしりでした。

実は妻が強硬手段をとったのは、私がハミル館という心理学研究室の独立棟で、世間と交わろうとせず、ネズミの実験ばかりしている私の姿にウンザリしていたとのことで、その狭い視野を広

げるために強硬策に出たとのことでした。しかしこのお陰で、私のレパートリーと視野がどれほど広がったことか。後に2つの大学で私は学長を勤めることになり、人前でお話する機会が多くなった時に、この妻の強引さに、どれほど私は助けられたことか。

これも、私にとってはまったく思いもかけない人生の新展開でした。

③国際心理学会との出会い

国際心理学会といえば、皆さんは2016年に横浜で開催された国際会議を思い出されるでしょうが、ここで簡単に国際心理学会の歴史を振り返っておきましょう。第1回大会は、あのエッフェル塔ができた1889年のパリ万博に合わせてパリで開催されました。その後、数年に1度、ヨーロッパ各地で開催されたのですが、1929年、第9回大会時に、初めてアメリカ大陸に渡り、イェール大学で開催

されることになりました。Figure 9 は同大会の記念撮影です。

Figure 9 の写真は非常に長い写真なのですが、当時としては信じがたいほど全体がシャープな写真です。Figure10は Figure 9 の中央右寄りの部分を拡大したのですが、同大会に特別講演者として招かれた白髭の条件反射の I. P. Pavlov が見えます。その左隣りはアメリカ生理心理学の祖ともいえる K. L. Lashley, Pavlov の下のシャツ姿は E. L. Thorndike です。なお Pavlov の右5人目に私の父・今田恵の姿が見えます。どうしてこのような特等席に座り得たのか、生前に父に聞いておけばと悔やまれます。父の右隣りの2人の日本人の名も。

なお Figure11は、大会の前年1928年に英語で出版され、会場で展示販売されていたパブロフ著の『条件反射講義』の内表紙に、パブロフから父がもらったサインです。

Figure 9

イェール大学における第9回国際心理学会の記念撮影



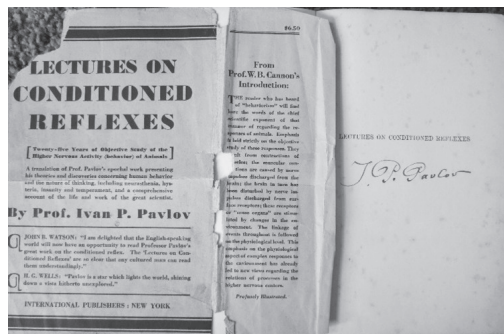
Figure10

Figure 9 の部分拡大。下から2列目、左から3人目に I. P. Pavlov がみえる。その右側5人目に父・今田恵



Figure11

Pavlov の著書に父がもらったサイン



さて本筋に戻りますが、国際心理学会はわが国でも1972年に東京で、2016年に横浜で2度開催されており、東京大会では下働きのお手伝いをした覚えがあります。なお1970年代になると日本も経済的に豊かになり、国際心理学会への日本人の参加も徐々に増えましたが、私は基礎心理学者として、「あんなのはお祭りだから、実質的でない」と国際学会には背を向けておりました。ところが1990年に、京都で国際応用心理学会が開催されることになり、1986年にその準備委員会が設置され、大阪大学の三隅先生が中心だったもので先生から直接電話があり、準備委員会に引きずり込まれました。国際学会を避けていたにもかかわらず、否応なしでした。

そして第22回国際応用心理学会は京都の国際会議場で、1990年7月22-27日まで開催されました。Figure12は初日の開会式の写真ですが盛大なものでした。ところが事もあろうに、Figure13に見られるように、その開会式の司会を同志社の浜先生（日本語）と私（英語）でやることになったのです。司会者席はステージの左端にありました。思いもかけない、華々しい国際舞台へのデビューになってしまいました。

この姿は勿論多くの日本の心理学者の目にとまることになるわけですが、その中に東大の東洋先生もおられました。先生は、国際心理科学連合（国際心理学会の主催組織）の日本代表理事を3期12

Figure13

Figure12ステージ左端の司会者席。

右：浜治世 左：今田寛



年間なさっていて、丁度後任を探しておられた時だったもので、早速先生からお声がかかり、自分の後任を引き受けてくれないか。ついては1992年のベルギー、ブラッセルでの国際会議の折の理事会で30分ほど講演をして、続いて行われる理事選挙のために自己アピールをせよとのこと。言われるままに講演、続く選挙の結果理事当選。そして1992年から2004年まで3期12年間、国際心理科学連合（International Union of Psychological Science, IUPsyS）の理事を勤め、その結果、図らずも、国際の今田になってしまいました。Figure14は、1992年に私が初めて理事会に出席した時の写真です。第25回国際心理学会の年でした。

Figure12

第22回国際心理学会開会式（京都国際会議場）

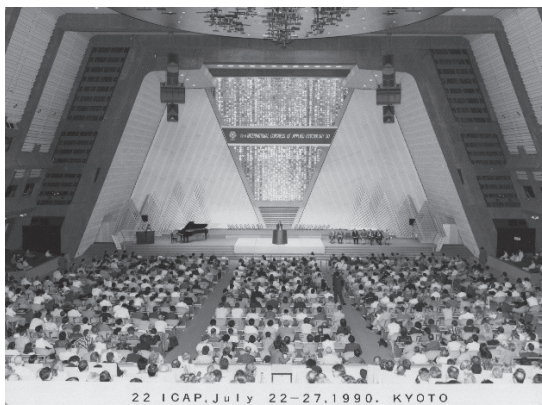


Figure14

ブラッセル（ベルギー）における国際心理科学連合理事会



先にも述べましたように、私は国際学会は「実質的でない」として避けていましたが、研究面では1970年代からアメリカの雑誌に論文を投稿、掲載されていました。今でこそ珍しいことではありませんが、1970年代当時、日本の心理学者でアメリカの心理学学術誌に投稿する人はほとんどいませんでした。その意味では私はこの道のパイオニアではなかったかと自負しています。

このような、学会および研究面での国際的活躍が評価されてか、私は日本心理学会から、2007年には国際賞・特別賞を、2013年には国際賞・功労賞をいただきました。

なおこうしてできた国際的人脈によって、私は多くの友人を海外から関学に招き、特別講演や集中講義をお願いしました。学習理論の Robert Rescorla, ポジティブ心理学を提唱し APA 会長をつとめた Martin Seligman, 私と研究分野の近い Bruce Overmier (後の Figure17A 参照), 私と同じ年にアイオワ大学の Child Welfare の部門で学位をとった沖縄出身の発達心理学者・小橋川慧 (カナダ在), Purdue 大の Robert Brush, 比較心理学者の Jeff Bitterman, アイオワ大学時代の仲間で比較心理学者の Robert Boyce, 国際心理科学連合の会計でカナダ人の Mischel Sabourin (Figure14の右から5人目), ポーランドの人格心理学者 Jan Strelau (Figure14の右から3人目) などです。Figure15は、1993年に、それぞれ3ヶ月間、関学に滞在し、大学院生に講義をした、ミネソタ大学の Bruce Overmier とカナダのウィンザー大学の発達心理学者、小橋川慧です。私の北米の2人の親友です。

Figure15
Overmier と小橋川慧と、大学院受講生 (1993)



なお1968-69年のロンドン時代にテニスのお相手をした Hans Eysenck も、1987年に関学で開催された日本行動療学会の特別講演に招かれ、彼と組んで関学のコートで学生相手にダブルスをしました。Figure16A, B は、関学でのテニスコートでの姿と、彼の研究所のオフィスでのダンディーな姿です。

Eysenck をこのように強調したのは、彼が1960年に編集した *Behaviour therapy and the neuroses* を、異常行動研究会のメンバー32人が協力して翻訳し、1965年に出版し、これが同会の最初の出版となったからです (その後の出版については、柳井ら (2026) を参照)。この翻訳書はよく読まれ、当時の価格が3200円と結構高価であっ

Figure16A
関西学院大学のテニスコート上の Eysenck と私 (1987)



Figure16B
ロンドン大学精神医学研究所での Eysenck (1969)



たにも拘わらず、1970年には再版されました。異常行動研究会はこのようにして、わが国に行動療法を広めるのに大きな貢献をしたと思います。そして多分この翻訳の作業を通して、異常行動研究会への心理学界の皆さんの興味が高まったためでしょう、1972年には、心理学評論誌から、まだ学会でもない一研究会について紹介するように執筆依頼を受けることになりました（今田、1972）。

実は Eysenck の所に私が留学したのはラットの実験をするためでした。なぜかと言いますと、彼の研究所には、遺伝的交配によって作られた高情動と低情動のラットがすでに38代を迎えて飼育されており、当時の私は恐怖の条件づけや回避学習の実験におけるラットの情動面での個体差に強い関心があったからでした。その成果は *Journal of Comparative and Physiological Psychology* (Imada, 1972) に掲載されましたが、帰国すると、Eysenck の所に留学したということだけで、Eysenck の「人格心理学」の講義をせよと同志社大学の浜先生から依頼があり、狭い意味での専門ではないので必死に準備をし、半期担当しました。その時の講義の様子は当時の受講生の村上君によって彼の書物の中で紹介されていますが、とても評判がよかったようです（村上、2005, pp.204-205）。これは、ラットの実験をするために Eysenck の所に行った私にとってはまったく思ってもみなかった講義依頼でした。その結果、私の人生でたった1回、本務校でもしたことのない「人格心理学」の講義をすることになりました。また行動療学会のための来日を機に、Eysenck の人と業績についてまとめるようにとの同学会から執筆依頼をうけ、図らずも彼の膨大な業績をまとめる幸いも得ました（今田、1988）。

私の国際的人脈は、今日のこのウィンターカンファレンスの誕生にもつながりました。1984年1月14日－17日、アメリカのコロラド州の Winter Park というスキー場で、「動物学習に関する第2回ウィンターカンファレンス」が開催されるので来ないかとアメリカの友人から誘いがあり参加しました。これは、昼間は思い思いにスキーを楽しむ (Figure17A)、夜は真剣な議論 (Figure17B) と団欒 (Figure17C) という、正に「よく学び、

よく遊ぶ」の会で、根っからのアウトドア派の私にはまことに楽しいものでした。

Figure17A

昼間は楽しく滑り (Bruce と)



Figure17B

夜は真剣な議論と



Figure17C

楽しい団欒



実は当時私は異常行動研究会の会長をしていましたので、早速これを持ち帰り1985年からこのウィンターカンファレンスが始まり、今年45周年を迎え、創始者の私がここに招かれているということは、感無量以外の何ものでもありません。もっともスキー場に来ながら、スキーもできない歳になりましたが。

④専門馬鹿からの脱却

これが最後の事例です。私は2003年に長く勤めた関西学院大学を定年退職しましたが、その後、広島女学院大学の学長を5年半勤めることになりました。その勤めを2011年に終え、やれやれと思って西宮の自宅に戻ったところ、早速教務課から電話があり、関西学院大学の企画で梅田で社会人対象に開講しているコースを担当せよとの依頼。断るわけにもいかないので、依頼主の戸田君に会うと、今後よろしくということで、週1回90分の授業を6週間、毎年（最初の年は年2回）担当せよとのこと。戸田君はテニス仲間で親しい間柄だったこともあってか、彼は遠慮なく私に注文をつけました。一つは、先生には「人生を豊かにする心理学」というタイトルでの連続講義をお願いしたい。またリピーターがいるので、同じ話は繰り返さないでほしい、という注文でした。これは、動物実験中心の実験心理学者にはきつい注文でした。しかしことわるわけにもいかず2011年から始めました。しかしたちまちネタ切れです。これは困ったと思っているときにひらめいたのが「ことわざの心理学」です。ことわざであれば「親は無くても子は育つ」（発達心理学）、「笑う門には福来る」（健康心理学）、「赤信号皆で渡れば怖くない」（社会心理学）などなど、人間の心や行動に関わりのあるものが沢山あります。しかもことわざは人類の叡智の結晶ですから、「人生を豊かにする心理学」という注文にフィットします。また実験心理学者として、これらのことわざの妥当性を裏付ける経験的事実はあるかという疑問をもって文献を当たれば、事実に基づく講義ができるわけです。また、これらのことわざは、上の括弧の中にも見られるように、心理学のあらゆる領域に関連しています。つまりこれらの講義の準備をすることで、私は心

理学をオールラウンドに勉強することができたのです。それが標記タイトルを「専門馬鹿からの脱却」とした所以です。このアイディアの下で、この梅田での講義は、2011年から、コロナで2021年の春、3回で中断するまで続き、その成果は2冊の書物にまとめました（今田、2015、2022）。なお2023年には、熱心な受講生の強い要望で、コロナで中断になった残る部分の講義を2度補講しました。Figure18は、梅田での講義風景です。自分で言うのもおかしいですが、随分評判の良かった講義だったようで、いつも定員オーバーでした。

この講義も、思いもかけず心理学を幅広く勉強する機会を私に与えてくれ、お陰で専門馬鹿の汚名を多少は拭うことができました。

Figure18

関学梅田キャンパスでの社会人対象の講義



5. おわりに

さてここまで、自分自身が思いもかけなかった出来事や人との出会いの事を、仮に「偶然の出会い」（chance encounter）と定義して、私の人生における“偶然”の出会いと、その後の予期せぬラッキーな展開について主に4つの事例を中心にお話してきました。今日のお話を終えるにあたって、これをどう締めるか。難しい課題ですが、まずこれまでの4事例を要約から始めます。

・不要になった留学試験の願書が偶然に私に回ってきてアメリカ留学が決まったこと、また留学

先の教授の思いがけない言葉で博士学位をとらざるを得なくなったこと。

- ・「Japanese psychology」という英語の講義を、留学生に教えざるを得なくなったこと。
- ・避けていた国際心理学会と関わらざるを得なかったこと。
- ・心理学を広範囲に勉強せざるを得なくなったこと。

これらは私の仮の「偶然の出会い」の定義には一致しますが、これらは本当に偶然の出会いと言えるでしょうか。そのような目でこれらの事例を見直しますと、すべての事例においてキッカケ人がいます。古武とス Pens, 武内と妻・節子, 三隅, 戸田などです。それではなぜこれらの人たちは私に思いもかけない依頼をしてきたのでしょうか。それは、私がその時まで築いてきたものに対して、他者が寄せる信頼が呼び込んだものではないでしょうか。そうだとするとこれらは純粋に偶然とはいえません。

私は関学時代に教職員による選挙で学長に選出されましたが、これは皆さんが私という人物に寄せる信頼の結果だったわけで、これを偶然と呼べないのであれば、上の諸事例も、私に依頼・強要したのが一人であるだけで、その人が「私なら出来る」と信じて依頼・強要したわけなので、偶然とはいえません。しかしこれらの出会いは、私にとっては思いもかけない出会いであったので、私はこれを広義の偶然の範疇に入れたいと思います。しかしこれは純粋の偶然の出会い (genuine chance encounter) ではなく、自らが招いた偶然の出会い (self-invited chance encounter) ということになります。そうすると、何が私に幸せな偶然の出会いをもたらしたかということになり、これは人から信頼される私を築いてきた私の生き方、生活信条の問題になってきます。そこで私の生活信条、あるいは私の人生を導いてきた座右の銘をいくつかご紹介することにします。

(1) 私の生活信条

- ・「よく学び、よく遊ぶ」 これは「着いて離れて」といっても、「木を見て、森も見て」と言い換えてもよいと思います。私は心理学という学問

をしてきましたが、同時に根っからのアウトドア派なもので、この「よく学び、よく遊ぶ」は文字通り私の人生そのものですが、同時に学問をするときには、くっ付き過ぎるな、「着いて離れて」という全体的視野の中での部分という視点を失ってはならないということを自戒し、また学生たちにもよく「自分のやっていることの所番地を忘れるな」と言ったものです。もっともこの頃の心理学は学際的になり複雑化し、なかなか自分の所番地が分からない時代を迎えているように思います。このような難しい時代を迎えてはいますが、本学会の皆さんは、この学会の経糸は「学び」であり、緯糸は良い意味での「遊び」であることを忘れないでいただきたいと願っています。

- ・「誠実、熱情、愛情」 これはキリスト教の牧師であった私の父方の祖父の遺言であったと聞きます。これは、牧師や教師のような人を導く者が忘れてはならない3要素だと思います。この3つの内の一つでも欠いた良い教育者はいるでしょうか。自分が愛する学問を、自分が愛する学生に、誠実に、熱情をもって教える、これはいわば当たり前の話だと思います。
- ・「偶然を偶然と思わない」 これは私がクリスチャンであることが多少かわっているかもしれませんが。難しい課題や注文が思いもかけず私に降りかかったとしても、きっとこれを機会に私に成長せよとの神様のお計らいだと考えることにし、私はめったに依頼を断らないことにしています。ただ何回か身の程知らずの受諾をして、ご迷惑をおかけした苦い経験もあります。
- ・「全力投球・手抜きはしない」 そして引き受けたからには目的達成のために絶対手抜きをしない、全力投球をするというのは私の生活信条の大きなものの一つです。このために、複数の後輩に「今田先生、もうちょっと手抜きすること覚えなあかん」と言われたり、「先生、教育に割いているエネルギーをもう少し研究に向けな」と言われたりしたものでした。前者は、行動療法で有名だった久野能弘、後者は大阪教育大学で教えた山本利和君からの忠告で、いずれも本会の会員でした。

・そして、親から教えられたことは、自分の行っていることに対する見返りを求めず、決して小細工をしないで、「私なら出来る」と信じて、誠実に愚直に生きることでした。

実は、今回この講演の準備をしていた時に、2月2日の日曜日に、これまでに何度も見た、好きなミュージカル映画「The sound of music」のTVでの再上映を見ました。カトリックの尼僧のマリアが、貴族のトラップ家の家庭教師をしているのですが、そこの主人、トラップ大佐に身分違いの恋心を抱くようになります。ところが思いもかけず大佐から彼女に対する恋心を打ち明けられ、つぎのように歌う場面があります。“Nothing comes from nothing.” (何もない所からは何も生まれない)、そして続いて、こんな素晴らしいことが自分の身に起こったということは “I must have done something good” (somewhere when I was young, 括弧内は意味をくみ取った意訳)、つまり自分が若い時にどこかで something good (何か良いこと) をしたからに違いないと歌うのです。マリアは、カトリックの尼僧ですから、この幸せを神様の恩恵に帰属させるのが普通でしょうが、自分が若い時に為した something good に帰属させている姿に、非常に人間マリアを感じます。そして、人を幸せに導く、この something good とは何か、これに答えるのは広い意味での心理学のつとめかも知れません。

そこで、以上の私の生活信条を、心理学者の立場に立って整理してみます。

・ヒトは動物の仲間です。共に、長い時間軸の上で時々刻々進んで行く一点である「イマ」に生きています。また広い空間の中の一点ココに生きています。つまりヒトもヒト以外の動物も、共に時間と空間がクロスする点、「イマ、ココに生きています」。しかしヒトとヒト以外の動物では大きく異なる点があります。それはヒトは「イマ、ココ」に居ながら、意識の上では大きく「イマ、ココ」を超えることができます。「よく学び、よく遊べ」を「着いて、離れて」とか、「木を見たら、一旦森から出て森全体を見よ」というようなことを書きましたが、

これはとりも直さず、人間的に生きよということに他なりません。逆に、人でも刹那的にイマの点をただただ繋いで生きている人は、動物的な生き方をしているということですから、そうなってはなりません。

・また「全力投球をする、手抜きはしない」とも述べました。つまり「イマ、ココに居て、イマ・ココを精一杯生きる」ということです。これは動機と目標の問題です。意識の上でイマ・ココを大きく超えることのできるヒトが精一杯いまを生きるには、目標は2つ必要です。一つは遠方の目標で、これが定まらないとその人の人生行路は後から振り返って見るとジグザグの醜いものになります。意識の上でイマ・ココを大きく超えることのできる人間は遠方の目標を持つことができます。人生観のような。そしてマズローはそれを「自己実現」と表現しました。自分に与えられた潜在能力の焔を、できるだけ広く深く耕やすことが人間らしい生き方だと思います。ただ遠方の目標のみだと行動に力が加わりません。目標勾配という言葉が示すように、目標が近くにあるほど、その目標へ向かおうとする力、つまり動機は強くなります。したがって、ヒトは、遠くの目標が定まったら、イマとその目標を結んだ直線上の、自分により近い所に、遠い目標と矛盾しない目標を設定することが必要です。これは行動に活力を与え、その効率を高めるために必要です。「千里の道も一歩から」です。後は、自己効力感 (self-efficacy) を信じて目標追求すればよいのではないのでしょうか。

・“Nothing comes from nothing” という言葉を引用しましたが、これは裏を返せば「努力すればするほど、多くのものが与えられる」ということであり、「多くのもの」とは「選択の自由が多くなる」ということです。お金がなければ何も買えない不自由を味わうように、努力して身に着く知識や技術も nothing であれば、そこには貧しい人生しかありません。この点では私も悔いが残ります。若いときにあれをやっておけば、これをやっておけばよかったと、今となっては悔いることが多々あります。若い人

たちには、自分の将来の人生の豊かさのために多くの投資をしてほしいものです。イマ・ココだけに生きずに。

（２）「偶然の出会いと人生行路の心理学」

（Bandura, 1982）を踏み石としたまとめ

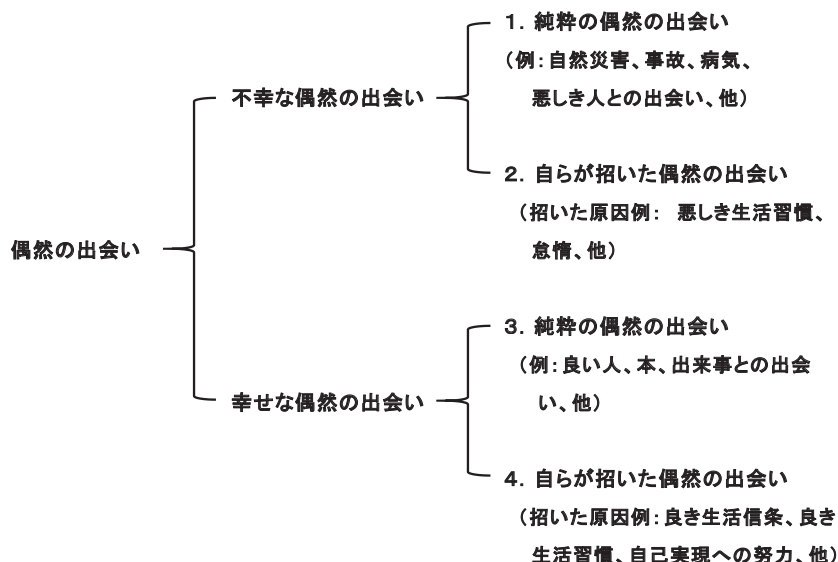
- ①変化には、自分の意思に基づく行動の変化と、自分の意思に関係のない思いがけない出来事・人との出会いによって、人生行路が思いもかけない展開をする場合があります。
- ②思いもかけない人生の展開をもたらす思いもかけない出来事・人との出会いのことを、ここでは「偶然の出会い」と定義します。そして、この偶然の出会いには、「純粋な偶然の出会い」（genuine chance encounters）と呼びうるものと、「自分が招いた偶然の出会い」（self-invited chance encounters）があるでしょう。「純粋な偶然の出会い」は予測不可能ですが、「自分が招いた偶然の出会い」は、ある程度予測可能です。ただ本人にとって思いもかけない出会いであり展開なので、ここではこれを広義の「偶然」に分類しました。
- ③それぞれは、その偶然の出会いが不幸せに展開

する場合と、幸せに展開する場合があります。不幸に展開しうる「純粋の偶然の出会い」には、自然災害、事故、疫病他があり、不幸に展開し得る「自ら招いた偶然の出会い」は、不健康な生き方、倫理観を欠いた生き方、怠慢など、俗に「身からでた錆」と言われるものに結果する現象があるでしょう。

- ④幸せの結果となる「純粋の偶然の出会い」は、宝くじにあたる、人生を変えるような人物や本に出会うなどが考えられます。「自ら招いた偶然の出会い」を招くのは、これまで述べたような、個人の努力、善行、健全な生き方などでしょう。これを一言でいえば、宗教的には、神様から頂いた潜在力を可能な限り顕在化させる生き方ということになるでしょうが、心理学的には、マズローの言う自己実現への努力をなすことと言えるでしょう。しかし「自ら招いた」ものでなく、「運」（＝純粋の偶然）も幸不幸に影響を与えるでしょう。先にのべたマリアは、親から美貌と美声を受け継いでいます。私も親から随分良いものをもらったと思います。

Table 1 は、これらの４通りの偶然の出会いと、その例あるいは原因例をまとめたものです。

Table 1
偶然の出会いの要約表



⑤「偶然の出会いと人生行路の心理学」(Bandura, 1982) は, Table 1 の 1 の不幸な偶然な出会いをした場合に, その不幸を少しでも軽減するための提案をしています。おそらくこれらの提案は, 2 による不幸からの立ち直りにも当てはまるでしょう。

⑥私は今回 4 の「自らが招いた偶然の幸せな出会い」と, それを招いた原因を探してみました。そしてマリアの言う ‘something good’ を為すとは, 心理学の言葉では, それはマズローの自己実現に向けての努力ということになるであろうと示唆しました。ただこれが当てはまるのは, 世の中の限られた職種にある者に限られるのかもしれませんが。私が知らない, 食うか食われるかの厳しいビジネスの世界での幸せにどの程度通用するのでしょうか。ただ, 偶然の出会いの心理学を唱えるならば, それは Table 1 のすべてをカバーする普遍的なものでなければなりません。

本論文を投稿する直前の10月に, 京都大学の北川進氏が今年度のノーベル化学賞受賞の朗報に接しました。その時に氏が引用されたパストールの言葉 *Chance favors the prepared mind* という言葉を知り, 本稿で述べた「自らが招いた偶然の出会い」と同じであることに気がつきました。「偶然は準備された心に味方する」, あるいは「偶然は努力に味方する」という意味でしょうか。まったくその通りだと思います。

そして講演の最後は, 次の感謝の言葉で締めくくりました。

感謝の言葉

「本会と Winter Conference の創始に直接関わった唯一の生存者として, まだ元気なうちに, 60年前, 45年前を振り返りつつ, 皆さんの前でお話できたラッキー・チャンスに, 心から感謝し, 本会と一緒に創めた他の 4 人の思いも併せて, 本会が「学び」を縦軸に, 「遊び」を横軸にした会として, “変化” させるべきところは変化させ, 守るべきものは守り続け, 今後ますます発展する

ことを心からお祈りします」。

引用文献

- Bandura, A. (1982). The psychology of chance encounters and life paths. *American Psychologist*, 37, 747-755.
- Beach, F. A. (1950). The snark was a boojum. *American Psychologist*, 5, 115-124.
- Dollard, J., & Miller, N. E. (1950). *Personality and psychotherapy*. New York: McGraw-Hill. 河合 伊六・稲田 準子 (訳) (1972). 人格と心理療法——学習・思考・文化の視点—— 誠信書房
- Dollard, J., Miller, N. E., Doob, L. W., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven: Yale University Press.
- Eysenck, H. J. (Ed.) (1960). *Behaviour therapy and the neuroses*. London: Pergamon Press. 異常行動研究会 (訳) (1965, 1970). 行動療法と神経症 誠信書房
- 今田 寛 (1972). 異常行動 (PBD) 研究会の経緯と活動状況 心理学評論, 15, 261-263.
- Imada, H. (1972). Emotional reactivity and conditionability in four strains of rats. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 79, 474-480.
- 今田 寛 (1988). Hans Jurgen Eysenck : 人とその業績 行動療法研究, 25 (H. J. アイゼンク特集号), 23-36.
- 今田 寛 (1995). 「ウィンターカンファレンスの10年を振り返って」 行動科学, 34, 1-4.
- 今田 寛 (2015). ことわざと心理学——人の行動と心を科学する—— 有斐閣
- 今田 寛 (2016). 日本心理学会オーラル・ヒストリー (2016年7月28日) インタビュアー: 高砂 美樹, インタビュイー: 今田 寛 (日本心理学会ホームページ)
- 今田 寛 (編著) (2022). ことわざから出会う心

理学 ミネルヴァ書房

- 今田 寛 (2022). 行動科学学会60周年, おめでとう! 行動科学 (60周年特集号), 60, 1-2.
- 今田 寛・澤 幸祐 (2014). メールインタビュー: 今田寛先生に聞く 動物心理学研究, 64, 55-61.
- Imada, H., & Tanaka-Matsumi, J. (2016). Psychology in Japan. *International Journal of Psychology*, 51, 220-231.
- 甲東22会記念誌編集委員会 (編) (2007). 思い出で綴る激動の国民学校生 甲東22会記念誌編集委員会
- Miller, N. E. & Dollard, J. (1941). *Social learning and imitation*. New Haven: Yale University Press. 山内 光哉・祐宗省三・細田 和雅 (訳) (1956). 社会的学习と模倣 理想社
- Mowrer, O. H. (1950). *Learning theory and personality dynamics*. New York: Ronald Press.
- 村上 宣寛 (2005). 「心理テスト」はウソでした 日経BP 社
- Sears, R. R. (1943). *Survey of objective studies of psychoanalytic concepts*. New York: Social Science Research Council Bulletin (No.51).
- 柳井 修一・権藤 眞織・今田 寛 (2026). 日本行動科学学会65年の歩みとウィンターカンファレンス40年の歴史 行動科学, 64, 91-98.
- 矢田部 達郎・園原 太郎 (編) (1957). 現代心理学の展望 第6章 八木晃, 動物の学習 角川書店

(2025年10月29日受稿, 2026年1月9日受理)